

夫31歳、カメラマン。

なぜ、

雲仙で

死んだの。

火砕流に吞まれたあなたに捧げる鎮魂歌

レクイエム

矢内真由美



夫31歳、カメラマン
なぜ、
雲仙で
死んだの。

「流に吞まれたあなたに捧げる鎮魂歌」

内真由美

矢内真由美 *Mayumi Yanai*

昭和37年（1962年）北海道生まれ。北星学園大学卒。昭和60年、帯広シティ・ケーブル入社。報道制作に携わる。取材中に知り合った矢内万喜男氏と昭和63年7月結婚。矢内氏の転勤により上京後の平成2年3月、長女出産。主婦業のかたわら、東急ケーブルテレビジョンの番組制作に参加している。

矢内万喜男 *Makio Yanai*

昭和35年（1960年）群馬県生まれ。東京都立大学法学部卒。昭和57年、NHK入局。報道カメラマンとして札幌、帯広放送局に勤務。昭和63年7月、真由美さんと結婚。昭和63年8月、報道局ニュースセンター転勤により帰京。NHKスペシャル「北極圏」「熱帯雨林」「霧の中の歳月」などの業績を残す。平成3年の湾岸戦争取材では、解放直後のクウェートに入り、衝撃的な映像を全世界に伝える。平成3年6月3日、雲仙・普賢岳を取材中に火砕流に遭遇、闘病むなしく6月25日、不帰の人となる。

夫31歳、カメラマン。
なぜ、雲仙で死んだの。

一九九一年十一月五日初版発行

著者——矢内真由美

© Mayumi Yanai, Printed in Japan, 1991

発行者——栗原幹夫

発行所——KKベストセラーズ

東京都新宿区大京町三番地 〒160 電話03—二三三—九二三 振替東京ハ—00063

印刷所——新井印刷 製本所——ナショナル製本 版下制作——大文社

ISBN4-584-18122-5 C0095

夫31歳、カメラマン。
なぜ、雲仙で死んだの。

突然鳴り響いた悲しみのベル

六月三日

これがあの人の顔だなんて

六月四日

『ヒマラヤ紀行』が私を導いてくれた

待ちに待った初の朗報

六月五日

オレハ死ナナイ、家族ニ会ウマデ

六月六日

あの人の手を握った日

ブロック塀があの人を救った

六月七日

私には何もしてあげられない

六月八日

ひたすら、ただ寂しい

六月九日

凍ったおにぎりとおの人の光

眠れない夜がいつまで続くの

六月十日

私の声があの人に聞こえた

六月十一日

冷たかった湖水の思い出

きつと手術は成功する

六月十二日

「順番だからしょうがないだろ」

六月十三日

この夢が現実になりますように

六月十四日

あの人の心には言葉の宝石箱がある

125 118 108 101 98 95 85 81 77 68 57 53 41 32 29 16 10

長崎ちゃんぼんは涙の味がした

六月十五日

127

「奥さん、痩せたみたいですわね」

六月十六日

131

いつも笑顔が励ましてくれた

136

二十四時間、そばにいたい

六月十七日

139

再生と炎症の追いかけっこ

六月十八日

143

もう一度、あの人の子を産みたい

146

カビになんて負けるな

六月十九日

148

それでもヒゲは生え、髪は伸びる

六月二十日

151

私たちの「湾岸戦争」

156

手は尽くし果てているなんて

六月二十一日

160

こんなにも素晴らしい仲間がいる

六月二十二日

165

童話が作ってくれた出会い

170

ついに容体が急変した

六月二十三日

188

美春の目は冷たく、悲しかった

六月二十四日

193

最後の朝がやって来た

六月二十五日

195

それはあの人が望んでいることだから

あとがき

201

七百度もの炎熱をともなつた大火砕流が、山肌を駆け抜けた。

一九九一年六月三日午後四時八分、長崎県島原半島の雲仙・普賢岳――。

新緑萌える木々は瞬くうちに炎を上げ、穏やかなはずの山村が一瞬にして灰色の世界と変わり果てた。新幹線並みの速さで押し寄せる火砕流は、警戒にあたっていた地元住民、警察官、消防団員、そして白熱した取材競争を繰り広げていた報道関係者の命をも呑み込んだ。

犠牲になつた報道関係者のひとりにNHK報道局映像センターのカメラマン、矢内万喜男氏がいた。急報を受けた夫人、矢内真由美さんは、翌日長崎入りする。

そして真由美さんは矢内氏の収容された国立長崎中央病院へ駆けつけた直後より、矢内氏の容体、治療の模様、

おりおりの感情をノートに詳細に書き綴った。回復を祈り、不寝の看病を続けるかたわらにしたためられた貴重な記録は、熱く、深く、読む者の胸を打つ。

本書は真由美さんによる、凄絶なまでの闘病の記録である。

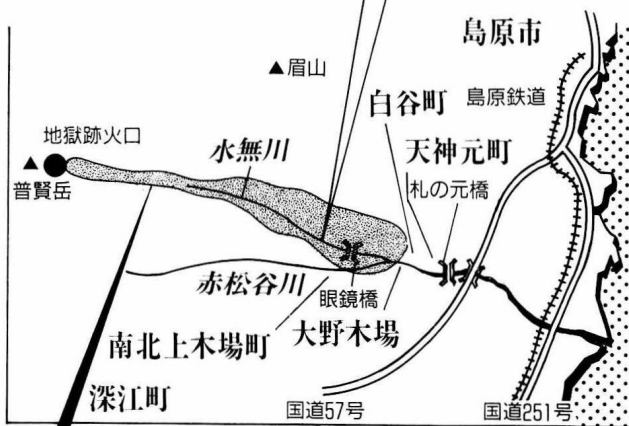
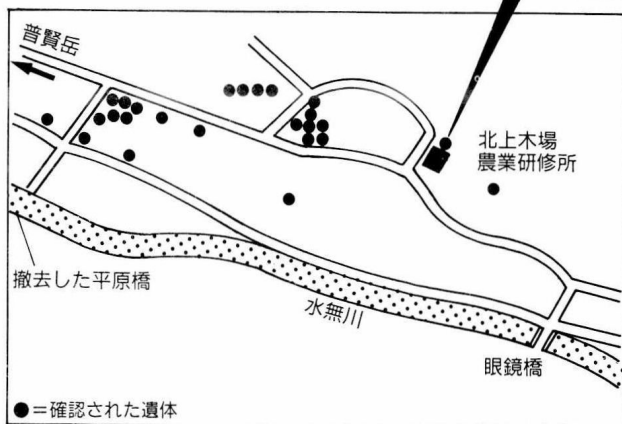
普賢岳は今もなお、その牙を隠そうとはしていない。四十人の命を奪い、四十人の生活の場を奪った火砕流の脅威は去ってはいない。人は大自然の怒りの前には、なんと無力な存在なのであろうか。

このような惨事が二度と繰り返されぬことを願って、本書を上梓する。

山の神よ、鎮まれ。

失われた四十の御霊よ、安らかに。

矢内カメラマンの罹災場所



6月3日の火砕流の範囲



装帧——漆烟一己

夫31歳、カメラマン。
なぜ、雲仙で死んだの。

突然鳴り響いた悲劇のベル

六月三日

もうすぐ夏が訪れることをはっきりと伝えるかのように、光のあふれた明るい夕方だった。時計の針は午後六時を指していた。娘と私、ふたりだけの夕食の支度いつものようにとりかかろうとしていると、突然電話が鳴った。この忙しい時間に電話してくるなんて誰だろうと思って、受話器を取った。帯広の母の声が聞こえてきた。

「なんだ、お母さん、どうしたの」

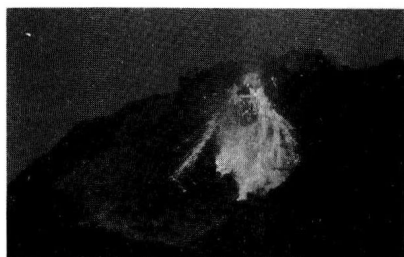
「まさか、まきちゃん、雲仙になんて行ってないよね」

興奮と心配が入り交じった母の声。

「えっ、行ってるよ。どうして……」

「いやだーっ」

母は鳴咽にも似た声を上げた。泣き崩れているようだった。テレビの画面に負傷者の「ヤナイ」という文字が出たのだという。私はなだめるよりも先に、母の取り乱した声を静めようとしていた。



火砕流発生の瞬間。中心付近の温度は摂氏一〇〇〇度にも及ぶ。

「だいじょうぶ、まきちゃんのことだから、心配ないよ」

そう言って電話を切り、すぐにテレビをつけてみた。どの局も、雲仙・普賢岳で発生した火砕流のニュースを流していた。アナウンサーの動揺した声、現場の記者の興奮したリポート、只事ではない様子が画面を通じてひしひしと伝わってくる。

画面から「ヤナイ」という文字が私の目に飛び込んできた。夫だ、と直観したとたん、自分を落ち着けようと必死だった。

あの人のことだから奇跡的に脱出していて、映像が切り替わった瞬間にはアナウンサーのインタビューにはにかみながら答えている姿が見られるのではないだろうかと確信していた。けれども、いくら待ってもあの人は出てこなかった。

数分して、NHK映像取材部の永見真さんから電話がきた。

「奥さん、申しわけございません。実は矢内君がけがをしまして……。火傷がひどいらしいのです」

からだが震え、受話器を握る手がしびれ、足までガクガクしてきた。その足に、しつかりしがみついていたのはまだ一歳の娘の美春だった。これは夢

ではない、現実なのだと、美春のちいさな瞳を見たとき、胸がしめつけられるような大きな不安が襲ってきた。そう、美春の夕食を用意していたのだ。お腹を空かして愚図りだした美春にどんなふうに接していたのか思い出せない。夕食を食べさせたような気がするが、そのほかのことは覚えていない。

テレビではどの局も、くりかえし普賢岳のニュースを報道し、その惨事を伝えていた。そして、画面に青い文字で、

——重傷 矢内万喜男 31歳 NHKカメラマン

という事実を何度も伝えた。

私はやつとの思いで、群馬県伊勢崎市の夫の実家に連絡した。義母は仕事から帰宅したばかりのようで、何も知らなかった。詳しい情報が入り次第、また電話すると言いつつ残してしばらくは待機してもらうことにした。

さて、どのくらいの火傷なのか、命に別状はないのか、どうしてそんなことに巻き込まれたのか、確かな情報が欲しかった。NHKなのに何をしているのだろうか、と正直のところ苛立った。

ほうほうからの電話が鳴る。ほとんど鳴りっぱなしである。私の勤める会社の同僚や夫の友人、姉妹、親戚縁者が口をそろえて言う。



炎上する水無川流域の民衆。
想像を絶する自然の猛威だ

「気をしっかりもってね」

気は確かに持っていたのだが、誰でもいいから傍にいてほしかった。そして、自分がここにいて、今この事実と対峙していることを確かめたかった。そうしないと自分を失いそうで、落ち着かなかった。

近所で仲のよい奥さんに来てもらった。何を話していたのか、その時かたわらで美春が何をしていたのか、そんなことさえも覚えていない。気は確かに持っていたつもりだが、やはり動転していたのだろう。

午後八時を過ぎて、私の勤める東急CATVの同僚、野沢悦代さんと伊藤健治さんが駆けつけてくれた。仕事が忙しいだろうから来なくてもいいよ、と言ったのに来てくれたのが嬉しかった。少しだけだがやはり心強くなる。

続いて、NHKで夫と同期入社のカメラマン末弘恭雄さんと梅原宣之さんが来た。彼らが入手した情報によると夫の容体は火傷がひどいらしく、大村市にある国立長崎中央病院に転送されたという。大きな病院に運ばれたということは相当に具合が悪いのだろうか、詳しいことはふたりとも知らなかった。ただ不安だけが、重くつのっていった。

十時をまわって、夫が帯広放送局時代に同僚だった山本健一記者と、同期

島原温泉病院には多くの被災者が運び込まれた



の出石直記者が仕事を終えて駆けつけてくれた。山本さんの顔を見たたん、夫との帯広での思い出がこみあげてきた。涙があふれ、からだの力が抜けて、その場にへたりこんでしまった。

いても立ってもいられず、転送されているという国立長崎中央病院に電話してみた。ああ、矢内さんのご家族の方ですか。心配いりませんよ、という答えが返ってくるようにと祈りながら、慎重に電話番号を目で追う。

事務担当の方が出て、

「集中治療室に入ったままなので、どんな状況なのかここでもわからないんです」

集中治療室でどんなことをされているのだろう。しかし、誰も口には出さなかった。

福岡の岡井仁子さんから電話が入った。昨夏、『NHKスペシャル 霧の中の歳月——大韓航空機撃墜事件——』の取材で夫が知り合った方である。これから病院のある大村市まで車で行って、様子を知らせてくれるというのだ。九州には親戚も友人も誰ひとりいなかったもので、お言葉に甘えてお願いすることにした。岡井さんには、夫が今年の一月下旬から四月上旬まで湾岸戦争